音声科学研究 I (1961)

上代日本語における母音組織と母音の意味的交替

泉 井 久 之 助

Vocalic System and Semantic Functions of Vocalic Alternations in Ancient Japanese

Starting from the vocalic phenomena of the 8th Century Japanese we can set up a table of reconstructed vowels of the Pre-Japanese as that shown on the last page of this paper. The vowels of the domain A are the back, those of the B being the front ones.

There had been a strong tendency toward the so-called vocalic harmony: a primary base-word (or a primary root-word) was vocally constructed only from among the vowels either of the domain A or only of the domain B. (Historically attested evidences of the 8th Century onward showed already the relax of this rule). E.g. ao 'blue', kamo 'duck', yoru 'night', tukï 'moon'; but: kötö 'cause, thing, word(s)', mönö 'thing', töki 'time, tide', kökörö 'soul, mind', etc. (Later forms of "relaxed" formations: kasö 'father', morö 'round', töfo 'far, distant, remote', usi 'ox, cow', etc.).

Interchange (Interchanging alternation)

There had been a seemingly curious phenomenon or tendence to differentiate semantic functions of the primary forms by way of interchanging their constituent vowels across between the two vocalic domains:

A	B
asa 'shallow'	ösö 'thoughtless'
a-no 'ego'	ö-nö 'self, ipse'
tukï 'moon, month'	töki 'time'
kumï(-do) 'hiding (place)'	kömö-ru 'shut himself up'
futa 'two'	fi 'one'
mu 'six'	mi 'three'
ya 'eight'	yö 'four'
yami 'obscurity, tenebrae'	yömö, yömi 'underworld'
tuma 'époux, épouse'	tömö 'companion, friend'
fï 'fire'	fi 'day, daylight'

泉井久之助：京都大学文学部教授（言語学）Hisanosuke Izui : Professor of Lingnistics, University of Kyoto

ka-re 'ille, illud'	kö-re 'hic, hoc'	
to-ru 'take'	te 'hand, arm'	
mati 'division-lane of cultivated land; lane in a town, town'	miti 'lane, road, way'	
na 'name'	ne 'voice, sound'	etc.

Intra-change

But the internal exchange of the vowels within each domain respectively did only provoke a slight, rather stylistic, but not categorical, differenciation of the semantic functions of the forms.

within A

mura-kumo, mora-kumo 'bank of clouds' (kumo 'cloud')
kabu-(tuti), kubu-(tuti) '(hilt-)head (of powerful figure)'
wonono-ku, wanana-ku 'tremble'
asa 'morning', asu 'Morgen'
tuna, tunu, tuno 'rope' etc.

within B

ni 'load, burden', nö(-tori) '(bearer of) load'
(ki-)si-mu 'to dye (yellow)', sö-mu 'to dye'
töki-wa, tökö 'eternal, eternity'
(mi-)ki, (sa-)ke '(Japanese) wine'
ke(-fu) 'this (day), today', kö(-zö) 'this (night), to-night' etc.

Similar phenomena may well be found also in Korean, e.g. *mat* 'taste (of the palate)': *mɤt* 'taste, flavour (aesthetic)', *sal-da* 'be alive': *sɤl-da* 'be raw, unripe', *pul-da* 'blow (of the wind)': *pAl-(A)m* 'wind', etc. But the scarcity of evidences in ancient Korean prevents us from finding out an adequate principle of their semantic differentiation.

Professor Alo Raun, Indiana University, has kindly informed me that in Finno-Ugric there may tentatively be distinguished three kinds of vowel alternations: (1) onomatopoetic-descriptive, e.g. in Estonian *kilin* vs. *kolin* (the former denoting a higher pitched noise), in Hungarian, *kever* 'mix in a gentle or reasonable way' vs. *kaver* 'mix carelessly, mess up', (2) deitic: in Finnish, *tässä* 'here' vs. *tuossa* 'there', in Hungarian, *itt* 'here' vs. *ott* 'there', *ez* 'this' vs. *az* 'that', (these procedures are no more productive), (3) 'paradigmatic': in Finnish, *palaa* 'burn (intr·)' vs. *polttaa* 'id (tr.)'.

Being a highly leading scholar in the field of Finno-Ugric linguistics, he is very cautious about the matter because of the paucity of evidences and remarks rightly that 'these phenomena must be treated separately for each language family because there is no exact analogy.' The same might be the view of Prof. Björn Collinder in his recent 'Comparative Grammar of the Uralic languages' (Stockholm 1960).

Was the semantic differentiation by way of vocalic alternations a specific phenomenon of Ancient Japanese only? or was it here a accidental one only? …… I would much like to be instructed in.

Hisanosuke IZUI

1　序

8世紀の記紀万葉を中心とする上代の文献において，そこに漢字をかりて表記せられた日本語が，その漢字の使用上の区別ないし群別によって，キ・ヒ・ミ・ケ・ヘ・メ・コ・ソ・ト・ノ・ヨ・ロ（および古事記ではなおモについても）の，12ないし13の音節がふくむ母音イ・エ・オに，それぞれ甲乙二類の存在を暗示することを，宣長の古事記伝における示唆によって発見し，これを精査して，門下の石塚竜麿（1764～1823）が「仮字遣奥山路」（1798以前に成ると伝えられる）を述作したことは，現在，言語学界国語学界における著しい事実である．竜麿の功績は，時をおいてその後，大正期に橋本進吉によって発見再考せられ，ついで池上禎造（「古事記に於ける仮名『毛・母』について」，国語国文，1932年10月号），有坂秀世（「国語音韻史の研究」1944年刊，「上代音韻攷」1955年刊），また書紀を中心とする大野晋（「上代仮名遣の研究」，1953年）等による研究の進展によって，問題は次第に明確化せられ，従来みとめられた /a/ /i/ /u/ /e/ /o/ の甲類5母音のほかに，/ï/ /ë/ /ö/ の乙類3母音がみとめられ，あわせて8種の母音は，それぞれの音声的な音価の考証を加味して，音韻的に，

後　舌　的　/a/　/o/　/u/
中　舌　的　/ï/　/ë/　/ö/
前　舌　的　/i/　/e/

の3部に分類せられ，その /a/ /o/ /u/ を男性母音，/ö/ を女性母音，/i/ を中性母音として，ウラル諸語の大部分，アルタイ諸語のほとんど全部，および痕跡的に朝鮮語にもみとめられるごとき，いわゆる「母音調和」の現象が，上代日本語にみとめられることも，次第に闡明せられて来た．しかもこの母音調和において，男性母音をふくむ音節は互にいわゆる結合単位中に結合してあらわれやすく，女性母音 /ö/ は男性諸母音とは結合が困難であり，ことにその /o/ とは原則として全くこれを避け，中性母音 /i/ は男女両性の母音をふくむ音節と自由に結合することができたと考えられ，そして /e/ /ë/ /ï/ は，直接，母音調和に関係がなかったとせられて来たのである．

ウラル諸語，アルタイ諸語の大部分において，母音調和の現象そのものが今日も行われることは事実である．しかしその調和の様相は一様ではない．ウラルおよびアルタイ諸語の範囲にふくまれる各言語ごとに，その様相はさまざまであることも多く，各言語においても，たとえばウラル諸語に属するオスティアク語のごとく，その方言ごとに大きい差異

を示し，この差異のうちには，母音の男女の2性，または上のごとき男女中の3性の母音による対立と調和の基準によってはすでに律することができないほど，音韻組織をいちじるしく崩壊もしくは推移せしめたオビ河の支流，カズィム河畔に行われる方言のようなものもある（篇末註1参照）.

しかし，たとい痕跡的にせよ，前舌母音と後舌母音とを対立的に取り扱おうとするのは，ウラル諸語，アルタイ諸語の全体を通じて，母音調和といわれる現象の第1則である.

かかる母音調和の現象は，すでに十分な姿を保つものではなかったにしても，8世紀の日本語には確実になお痕跡をとどめていた．しかしその組織は，かならずしも，/i/のみを中性とするものではなかったと，思われるのである.

本篇においては，慣例にしたがい，平仮名は乙類の母音をふくむ音節を示し，片仮名は甲類のそれとともに，併せてまた甲乙の区別を示すことのなかったその他の音節をあらわす.

2　母音組織の図式

A

上代文献にあらわれる日本語の /a/ /o/ /u/ の3母音が，いわゆる男性母音として同種に属し，これをふくむ音節が，結合単位（語根または語幹）の中において，直接たがいに結合しやすいことはいうまでもない.

a—o，またはo—aの結合については，

アヲ（青）・アソ＝ビ・アソ＝バシ（遊）・カモ（鴨）・カモ（助詞）・マヨ（眉）；オヤ（親）・オヤ＝ジ（同じ）・ソラ（空）・ソナ＝フ（具，古事記），等，

など，多数にその例をあげることができる.

o—uまたはu—oの結合についても同様である.

オク（奥）・オク＝ル（遅・送）・タ＝コムラ（手腕）・ヨル（夜）・ヲツヅ（現）；スソ（裾）・フト（太・大）・タ＝フト＝シ（尊）・ツド＝フ(集)・ツノ（角）・クモ(雲・蜘蛛)・クロ（黒），等.

さらに，a—u，u—aについては，

アム（虻）・アユ（鮎）・カム＝カゼ（神風）・アス（明日）・サル（猿）；ウカカ＝ヒ（窺）・ウカ＝ツ（穿）・クハ＝シ（美），等.

があるばかりでなく，a・o・uを通じるものとして，上の「コムラ」のごとき語例も存在

する．（コムラは或いはコ＝ムラと分たるべきものかも分らない）．要するに，a—o—uは，音節結合の母音線（略して結合線）をなすということができる．この結合線は，音声学的に，最広かつ中舌的なaから最狭かつ最も後舌的なuにいたる一線である．

一方，aはまた，a—e—iの結合線を構成する．たとえばa—eおよびe—aについては，

アセ（汗）・カケ（鶏）・カゼ（風）・カセ（枠）・アメ（飴，傍名抄）・サネ（核・真実に）；エダ（枝）・ヘタ（辺），等．

があり，e—iおよびi—eについては，

セミ（蟬）・メヒ（婦負，地名）・ヘキ（人名）・ネリ（練）・セリ（芹）；イネ（稲）・イヘ（家）・ヒメ（姫）・エ＝ヒメ（伊予ノ国）・ヒレ（肩布）・ヒレ（鰭）・ミヘ（地名），等．

をあげることができる．a—iおよびi—aに関しては，「アキ」（秋）・「タニ」（谷）・「タキ」（滝），および「チカ」（近）・「チカラ」（力）があり，この種の例はきわめて多く，a・e・iのすべてを通じてふくむものとして，「カレヒ」（乾飯（カレイヒ）・加礼伊比の約）・「カレヒ」（乾鰹（カラエヒ）の約，傍名，加良衣比，加礼比），の固定的合成語，或いはこれもまた合成語ながら，「ミカネ」（御金嶽またミミガネともせられる）がみとめられる．結合線a—e—iは，音声的に，最広かつ中舌の母音aから，最狭かつ最前舌的な母音iにいたる一線である．

頂点を共通にする2つの結合線a—o—uとa—e—iのそれぞれ末端，uとiのと間にも，また次のような結合線が成立する．

ウシ（牛）・ウシ＝ナフ（失）・ウシ（大人）・ウシ＝ハク（領治）・ウチ（内）・クキ（洞，クき「岫」とは一応別）・クシ（櫛）・クニ（国）・スミ（墨）；イヌ（犬）・キク＝の＝イけ（企玖乃池）・キヌ（衣）・アキヅ（蜻蛉）・ミヅ（水）・ヒツ（櫃）・ニフブ＝ニ（にこやかに），等．

このうち「クキ」は，或いは動詞「クク」（潜）の連用形による名詞形として，或いは除外すべきものかと思われる．

/ï/は中舌母音，最狭のものの一つとして，図において縦にはaの下，横にはi—uの線上に来るものである．この結合線上においてi—ïおよびï—iの結合は，その例は少ないけれども，なお，

キび（吉備，国名または穀名），・シひ（人名）・コジひ（人名）・ヒヂき（地名，比治奇の灘）・シき（地名）；きリ（霧）・きシ（岸），等．

を見出すことができる．このうち「きリ」は動詞「きル」（万17巻，霞立春日之霧流（きレル））の活用的派生形として第2次的に固定したものかも分らない．なお，「きヂ」（木道（きヂ），紀伊へゆく道）は，「き」と「ヂ」の合成語であって，結合単位ではない．従ってここに入れることはできない．

一方uとïについて，u—ïの順においては，

クき（岫）・ツき（月）・ツき（槻）・ワキ＝ヅき（脇机）・オク＝ツき（奥城，或いはオク＝ツ＝き「城」か）・スぎ（椙）・ツツき（山城の地名）・ミ＝ツき（御調）・ムき（椹，麦はムギ）・ユき（斉忌）．

がある．このうち，「ツき」（槻）・「スぎ」（椙）・「ムき」（椹）の「き」は或いは「木」にあたり，「ワキヅき」（脇机）・「オクツき」（奥城）の「ツき」も，むしろ「ツ＝き」であって，四段動詞としての「ツク」（築）の連用形とすることはできないと思われる．「ツク」の連用形は，「ツキ」であって「ツき」ではない．しかしそれらは——殊に樹名に関しては——きわめて早く固定して，その合成語であったことも忘れられる程度に結合単位化していたであろうと考えられる．ï—uの順による結合単位の例は（ほとんど）見出すことができない．u—ïの順においても，そのïはほとんど常に音節「き」にあらわれ，「き」が結合単位の末尾に立つことに注意しなければならない．これは「き」が単音節の独立語として合成形の末音節に立ったか，あるいは稀に活用の一形としてあらわれたかを，示すものと思われる．

以上の結合線a—o—u，a—e—i，i—ï—uは集って三角形a i uを構成する．この三角形の領域をわれわれは領域Aと名づける．

Aにおいて，結合は，単にa—u，a—i，i—uの線上に行われたばかりではない．またそれぞれの頂点から，対角線上の中点に向う線についてもまた行われた．

たとえばa—ïについては，サき＝デ（さき手）・ナぎ（葱・水葱）・ハぎ（萩）・アき（阿騎，地名）・サき（沙紀，地名）・マき（桙）・ミ＝マき（崇神天皇）・イマき（地名）・ワき＝イラツコ（和紀郎子，人名）・カひ（甲斐，地名）・カみ（神）等がある．このうち，植物名「ハぎ」・「マき」等については「き」（木・樹）との古い合成語と見るべきものもあるかと思われる．書紀にあらわれる「タひ」（秉炬）は万葉に見える手火（タび）（炬）であって，「タ」（テ・手）と「ひ」（火）に分たるべき合成語であろう．ï—aの順に結合する例には，わずかに「みナ」（皆）がある．

i—oについては，シロ（白）・シノ（小竹）・シホ（塩）・イトコ（親愛の人）・イト

(絲)・イモ（妹)・ニコ（柔)・ニホ＝どり（鳰)・ヒコ（彦)・ヒモ（紐）等があり，o—iについては，オキ（沖)・オシ（地名)・オミ(臣，古い合成語か)・ヲシ（鴛鴦)・ヲヂ(老翁)・ヲチ（遠)・トジ（刀自)・ドチ（達，接尾辞)・モチ（黐)・モミ＝ヂ・モミ＝ヅ（黄葉)・ヨリ(助詞)等がある．このうち「ヒコ」は「日子」として分析せらるべき可能性があり，「モミ＝ヂ」は万葉においてただ2箇所，古事記におけるごとく「も」によって，「母美知」としてあらわれるところがある（総索引単語篇1180)．しかし書紀・万葉においては，すでに毛・母の区別が失われていたことは，周知のごとくである．

u—eに関しては，「この＝ウレ」(梢)・「クエ＝ル」(蹴)・「ムレ」(丘)・「ユエ＝ニ」(故)・「スエ」(末)・「フネ」(舟)・「フエ」(笛)・「ヌテ」(鐸)・「ツネ」(常）等がある．クレ（暗）はクル（暮）の名詞的派生の一形として，全体を結合単位と見るべきではないと考える．「ヌテ」も，その「ヌ」が「ナ＝ス」・「ナ＝ル」(鳴)・「ナ＝ク」（泣，鳴）の「ナ」と交替するものとすれば，「ヌ＝テ」(鳴手，柄のある鈴)として，まさに合成語と見るべきものであろう．

e—uの順に関しては，「エツリ」（芦藿—木舞)・「エグ」(植物の名)・「ネブ」（合歓木）等があげられる．このうち「エツリ」は，構成的に，「エ（枝)＝吊り」として分析せらるべきものであろうかと思われる．

つぎに三角形の三辺上の中点は，たがいの間にも結合関係が見出されることがある．たとえばo—ïの間には，「コひ」(恋)・「ヲぎ」(荻）が見出される．しかし「コひ」は動詞「コフ」による一形として立つ可能性が強く，「ヲぎ」もまた乙類の母音を持つ「木」との合成語かと考えられる．「よもぎ」（余母疑，万葉では「よモぎ」）もまた同様であろう．ï—oの順の例は乏しい．一方eとï相互の間，eとo相互の間に，結合単位が構成せられる場合は見出されることが少ない．（「ソテ」(袖）は結合単位として疑問の形であり，「トネ」(川名）はその来由に日本語として疑問がある)．これには，あとに述べるような理由があったかと思われる．o—eに関して「オレ」(爾）の語があっても，これは「ワ＝レ」(我)，「タ＝レ」(誰)，「こ＝レ」(是)，「そ＝レ」(其）のごとき一連の代名詞に共通の構成要素「レ」をふくむものとして，語源的には「オ＝レ」と切らるべき合成形である．また「セト」はセ＝ト「瀬・門」であり，「セコ」(夫）は「セナ」(夫）の「セ」をふくむ「セ＝コ」(兄＝子）であろう．

以上の事実と語例は，その道の人にとって周知のことである．

これらの語例の頻度から見て，結合線が優越的に鮮明なのは，三角形の3つの外辺であ

る．その語例は上掲のほかにも多い．しかしそのうち，ïのｉおよびｕに対する結合関係に語例より見て不安定なものがあったのは，ïの顕現が当時すでにｉと合一して，新しく /I/ を構成する過程にあったからであろう．この /I/ は従来の /i/ を時に /ï/ とし，大部分の /ï/ をすでに /i/ に化していたと思われる．同じ事情は，三角形の内部において，ａ—ï相互の結合関係にも干渉して，本来ａ—ï相互の関係であったものの多くを，ａ—ｉ相互の結合関係に移し，その結果，ａ—ｉの結合線が特に鮮明にせられたと考えられる．ｏ—ï相互の関係についても同様にいうことができる．その多くがｏ—ｉの関係に移行した結果，前者ｏ—ï相互の関係は上に見たごとく，いちじるしく安定性を欠くものとなって，反対にｏ—ｉ相互の結合関係が，語例上にうかがわれるように，特に強化せられて来たのであろう．

このｏとｉの結合は，後部母音と前部母音の結合である．この結合関係が，母韻調和の原則より見て，本来異例的であることは，同様の結合を示すｏ—ｅ，ï—ｅのそれぞれ相互の結合が，結合単位的に確実にあらわれることの，きわめて少いことによっても知ることができる．

三角形Ａの領域は，本来，主として中・後舌母音の領域であった．

しかもこの領域において，前部母音ｅ・ｉをふくむ結合線のあるものが，優越的なものの一つであることは，Ａの性質に対する新しい改変，新しい結合関係の導入があった結果によると思われる．

B

残る母音öとëについては，結合単位的に，上のｏおよびïに対するｅのごとき，稀少関係がみとめられる．

öは原則的に，Ａの領域における後部母音ïに対する単位的な結合関係がない．「こきダ」（幾許）・「こきシ」（幾許）に対して，「こキタク」・「こキバク」，「ここダク」・「ここバ」（幾許）があるのを見れば，その「こ」と「き」の間に，結合関係における中断があったのは明らかであろうと思われる．

öとｕ・ｏとの関係についても同様にいうことができる．この３つがそれぞれ結合関係的な様相を示すものには，「とブサ」（鐇？　樹梢），「オよヅレ」（妖言）がある．しかしこの２語とも，その構成様式の説明がいまだ明瞭ではない．

一説によって /i/ は結合関係に影響するところがなかったとすれば，「ウシろ」（後）・「ムシろ」（席）・「クシろ」（釧）もまた，ｕとöとの結合と考えられるかも知れない．しかし

これらは或いは「シろ」(代,「之呂」) との合成であり，或いはその「ろ」は,「オギ＝ろ」(蹟)・「とこ＝ろ」(所)・「もこ＝ろ」(如，古事記金沢本「母許呂」) にあらわれる古い接尾辞であり（オク「奥」・とこ「所」・モコ「如」)，一般に上にあらわれる「ろ」は取りはずして考えることができるものとも考えられる．「ヲそ」(嘘) に対する「ヲそ＝ろ」(嘘) の「ろ」も同様であろう．「モコ」(対者，聟，一緒) は上の「もこ＝」と後述するごとき交替関係にあったものであって,「シこ＝めク」(醜めく) の「めク」，すなわち後世に「メク」としてあらわれたものとも交替形をなすものであった．

このöとoの関係も少々複雑である．一般にöは，円唇的母音との結合関係において，同じ乙類のöと結合することがもっとも多い．

こぞ（去年)・こと（事・言)・こと（如)・こと（琴)・こも（菰)・ころ（頃)・ころも（衣)・との（殿)・とも（艫)・とよ（豊)・もの（物，古事記)・よそ（外)・こころ（心)・ところ（所)・もと（本）等．

の例を多数にあげることができる．

これに対して，一見，ö が甲類のオ列音oと結合するかのごとくに思われるものにも．

オと（音)・オこ＝ス（起)・オそ（鈍)・こホ＝ル（凍)・そホ＝チ（沾)・そホリ(山名)・とホ（遠)・のボ＝ル（登)・ホこ＝ル（誇)・ホろボ＝ス（亡)・ホとと＝ギス（時鳥)．

などその数は多い．しかしこれらはすべて，乙類の，こ・そ・と・の・よ・ろ・(および古事記では「も」) の各音節以外の音節との結合である．すでに母音調和の現象が痕跡的にもせよ，みとめられる以上，起源的に，「以外」の音節を乙類から除外すべき理由は，原則的に，存在しない．もしこの「以外」の音節においても，その以前の時期に甲乙2類の区別があったとすれば，従って更に，上にあげた「オと」以下の例語において，そこに立つ母音の乙類が本来的なものであったとすれば，これらにおける一見甲類のごとくに考えられるオ列の母音も，すべて，乙類のものとして，その以前は，たとえば「オと」は，/ötö/ として考えらるべきものであったろうと考えられる．これをもし正しいとすれば，ö は後部母音oと結合関係に立つことは，原則として，本来なかったことになる．

しかしこのöは，領域Aをかこむ一辺，a－e－iの結合線上の各点に対しては関係を持つことができる．

öとaについては，確実なものに,「アそ」(親称)・「カそ」(父)・「マろ」(円)・「とガ」(咎)・「とハ」(永久)・「アどもフ」(率)・「そバ」(柧棱)・「タの＝ム」(頼)・「マそ」(全)・

「こヤ＝ル」(臥)，がある．「ナごリ」(名残)は万葉巻四，「塩干の名凝(ナごり)飽くまでに」，巻六，「難波潟塩干の奈凝(ナごり)よく見てむ」などにあらわれるものをその原義とすれば，大言海が説くように，これを「波残り」として解することも，他に例はないにせよ，或いは可能かも知れない．しかし本来，これは，「のこリ」(残り)に対する不完全な交替形であろうと思われる．一般にöのaとの結合の場合は少ない．

öとeの結合を示す単位の例も，比較的少ない．しかし「こエ」(声)・「ネもころニ」(慇懃)・「ヲ＝そネ」(小硝)・「イツ＝とセ」(五年)・シケこ＝シ(醜)等があげられる．地名「こセ」も，むしろこのように乙類の「こ」によってあらわれるのが普通とせられる．しかし「是」の「こレ」は「こ＝レ」であり，「其」も「そ＝レ」である．

öはiと結合することがもっとも多い．

イヤチこ(灼然)・イごの＝フ(罵)・イキどホ＝ル(憤)・シこ(醜)・キそ(昨夜)・ヒこ＝ヅル(引づる)・ヒと(人)・ヒと(壱)・イのチ(命)・シこリ(頻)・シとと(巫鳥)・キこ＝ス・キこ＝ユ(聞)・ミどリ(緑)・イろ(色)・ナハ＝シろ(代)・こシ(腰)・こシキ(甑)・とリ(鳥)・とキ(時)・とキ＝ハ(常盤)・とシ(年)・よヒ(宵)・よミ(黄泉，字鏡「与弥還」)

このうち，「イごのフ」の構成と意義についてはなお疑問があり，「イのチ」は助詞「の」をふくむ合成語であったかも分らない．「よミ」の読み方は，仮に字鏡より借りて来た．上代の古典においては一般に「よも＝ツ」の形のみがあらわれ，「よミ」はただ「黄泉」と意訳して書写せられているからである．

以上，öの結合関係を見れば，

1　領域Aにおける後母音 /o/・/u/・/ï/ とは，起源的に，原則として結合しない．

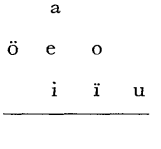
2　しかしAの一辺，a—eのそれぞれとは少数の例において，iとは多くの例において，結合することができる．

3　そしてさきに見たごとく，Aは原則として，後母音の非口蓋音的な領域である．

4　しかもöの音価は口蓋的円唇音である．円唇性のないa—e—iの線上に来ることができない．

従って，öは，a—e—iの結合線のかたわらにおいて，三角形Aの外側になければならないことになる．

これをまとめて左のごとく図示することができるであろうと思われる．



ö はａ—ｅ—ｉ線上の各点と結合することができた．しかしその中舌的なａとの結合の例数には，限定性が強い．ｅとの結合の場合の少ないことが，何の原因によるかは分らない．しかしｉとの結合は豊富であって，上代文証の範囲がなお広範であり得たならば，その結合の例は更に増加せしめることの可能性を思わしめるものがある．ö は，従って，ｉの音色を多分にふくむ口蓋的な音価を帯びていたものと思われる．

更にいまひとつの /ë/ は，不安定なところをもつ音韻である．「ナガ＝イキ」（長息）が「ナげキ」（嘆）となり，「タカイチ」（高市，地名）が「タけチ」となるように，この母音には /ai/ の熔合から来た広いäに類する音価もふくんでいたかと思われる．またカ行下二段動詞の連用形は，その成立の経過から見て，語幹末尾の /a/ に，/i/ が加えられたものと考えられる．そして上代の文献にあらわれるその形は，たとえば「向く」・「任（マ）ク」に対する「ムけ」・「マけ」のごとくに，乙類のëによる「け」である．この「ムけ」・「マけ」はまたそのまま名詞形としても用いられた．要するに /ë/ は，ｉの音色をふくむ口蓋音的な性質を示すものであったと思われる．

この性質をもつ /ë/ もまた，領域Ａにおける後部母音ｕ・ｏ・ïに対して直接的な結合関係を示すことがきわめて少い．「ウけ」（槽）は独立の名詞であるよりは，むしろ動詞「ウク」（受・承，下二）の連用形による名詞的派生形（「受器」）であった可能性がつよく（しかし大言海は特徴的なその分析の方法によってこれを「大＝筍」とする），そして「ウけ＝フ」・「ウけ＝ヒ」（祈誓）は，その動詞的拡張子 élargissement（または接尾辞）「＝フ」による第２次的派生による形であろう．ただ地名としての「けツ」が紀の舒明に「気（ケ）蒐（ツ）のワクコ」としてあらわれる．この「ツ」は或いは「津」であって，全体は単綴の２語による合成語であったかとも考えられる．「ウ𢍰」（上）は一説によれば「大（ウ）＝辺」と分析的に解釈せられる．この語の成立と構成にはなお疑問がある．「ウめ」（梅）は，本来の日本語詞ではなかったかも分らない．

ë がｏおよびïと結合関係をもつ例を見出すことには，やや困難があろうと思われる．

要するに，ë が，ｕ・ｏ・ïと直接に交渉をもつことは，原則的にきわめて乏しいといわなくてはならない．この事情はöの場合と同似的である．

しかし，ë がａと結合単位を構成する例は相当に見出すことができる．

ヤけ（宅）・ミ＝ヤけ（屯倉）・ナ𢍰（鹹）・タ𢍰（桴）・タけ（竹）・タけ（岳）・サけ（酒）・ササげ（荳角）・サ＝バ𢍰（五月蠅）・カめ（亀）・カげ（蔭・光）・ヒ＝カげ（蘿）・アめ（天）・アめ（雨）・マめ（豆）・サ𢍰（助詞）・ナ𢍰（苗）・けタ（桁，字

類抄).

このうち鹹（なべ）を意味する「ナ𪜈」は「ナ」（食品）と「𪜈」（瓮，すなわち，イツ𪜈「厳瓮」，クカ𪜈「探湯瓮」の瓮）との古い合成語であり，「サけ」も一方に「サみ」(さ身）があるのを見れば，接頭辞「サ」との古い合成語かとも考えられ，その「け」は「ミ＝キ」（御酒）の「キ」と後述する交替関係における母音であったかとも思われる．同様に，「カげ」（光）も，「わたる日の加気（カげ）にきほひて」（万葉巻20）における意義に関しては，「天照るや日之異（ヒのケ）に干し」（巻16）の「ヒのケ」（日の光）と異るところがない．この「ケ」が「カげ」の「＝げ」（または「け」）と交替関係に立つ単綴の独立語であったとすれば，「カげ」も「カ」（「とヲ＝カ」，すなわち「十日」の「カ」）と「け」による古い合成語であり，単一の結合単位とはみとめがたいであろう．しかしこれらは当時においてもすでに熟成した合成語であって，その結成度のかたさは結合単位のごとくであったと思われる．

これに対して．ë がｉと結合する場合は，ａとの場合ほどにも見出すことができない．

イけ（池）・イめ（夢）・ニ𪜈（苞苴・贄）．

ëとｉの結合単位を例示する語例が少ないのは，資料の範囲がせまく限られているためもあるけれども，またこのëが，その結合単位の大部分において，すでに早くｅと合一，あるいはｅに吸収せられていたためかと思われる．従ってëとｅとの結合する単位形式を見出すこともむずかしい．

ëがöと結合する例には，書紀に「こめ」（米）がある．「苔・蘿」を意味する語はまた一般に「木（こ）＝毛（け）」であったとせられる．倭名抄もまたこれに従つているが，その読み方として示すのは「古介」である．これは「コけ」としなくてはならない．「コけ」をもって，8世紀における正しい形とすることができるならば，ëのｏに対する結合の一つの例とすることができる．ëがöと結合する例の乏しいのは，やはり，ëが早くｅに吸収せられたためと思われる．

以上によって，全般的にëが，音韻組織に占める位置を，次のごとくに考えることができる．

1　ëは領域Ａの非口蓋的後部母音ｏ・ｕ・ïと，確実な単位において，結合することが少ない．

2　ëはａ・ｉのそれぞれとの結合関係がある．

3　しかし領域Ａの内部は原則として後母音の非口蓋的領域である．

4　ëのすべてがaiから来たとは考えられない．しかしaiから来たものをもふくむこと

は，ëがほとんどäとして，eより広い口蓋的母音であったことを示すと思われる．しかしëは，a・e・iと同様に非円唇的である．

従ってëは，a—e—i線上，aとiとの中間にあったと考えられる．われわれは領域Aに対して，線a—iと点öとをふくむ領域をBとなづけることができる．a—iの線はA・B両域に共通である．Bは，a—iの線をはなれるに比例して円唇・口蓋的な性質をます領域である．

B　　A
a
ë
ö　e　o
i　ï　u

結合関係的に，aおよびiは，それぞれ，爾余のあらゆる母音と単位的に結合することができる．8世紀の日本語において，結合関係的にいわゆる母音調和をみとめるならば，aもまたiとならんで，いわゆる中性的な母音であった．限られた文献から見出されるその語例の絶対数は少ないけれども，本来前母音的なë・eもまた，中性化し，A・B両域に対して，単位的な結合関係を左右ほとんど平均的に持つ（あるいは持たない）ことを示している．

この母音組織はやや特異である．a・iを上下の頂点としてそれぞれ左右の領域の各点と結合せしめつつ，しかもaの結合線はa—o—uにおいてもっとも強く，iのそれはöにむかってもっとも強くあらわれる．ともにかつて鮮明にはたらいていた母音調和の流れの名残りを示す現象であって，調音的に中舌的なaは，結合的には後部母音（男性母音）としてはたらいていたことを示し，iは，前部母音として，本来，いわゆる女性的な結合関係にあったことを示している．しかも，iがその他の場合において，aと結ぶことが，iの他の結合に比して多いのは，aが中性的な性質を帯びてからのことであって，この結合関係の増加は，もっとも顕著にaの中性化をものがたる現象である．かかる2つの中性母音が，同時に一方において，結合関係の流れにおける上のような片よりの現象を示すことは，すなわち，文献以前に曽て存在した更に鮮明，かつ，一貫的な母音調和の組織と活動との名残りをここにとどめていることである．aの中性化，iの中性化，この二音の動向によって調和の組織は不徹底になって来た．のみならず8世紀までに，母音調和の現象そのものも，その産出的な活動力を失い，ただ結合単位の一部のものにおいて，新しい傾向（無調和への）によって次第に歪曲，整理あるいは没却せられつつ，痕跡的にのこされて来たにすぎなかった．

編纂の上では古事記より8年ばかり遅れるにすぎなかった書紀に「モ」と「も」の区別が失われて，「もの」は「モの」，「とも」（伴）は「とモ」となっているのを見れば，甲乙の区別の喪失は書写の上でも急激に「モ」の上に及んで来たことがわかる．「モ」に甲乙

を区別しないことは，ここに新しい型の，おそらくは当時における清新な「新」仮名遣いにおける新しい現象の一つとなって来たのである．とすれば他の場合の甲乙の区別も，少くともその一部は，単に書写の上における一種の歴史的仮名遣いとして，文語意識における記憶的な現象になっていたと，考えられなくてはならない．従ってそれは固定的であった．甲乙の区別がいわゆる結合単位中にのみ保存維持せられて，活用する部分と接続する小辞（助詞）に原則として，及ぶことがなかったのも，このためであった．甲乙の区別をもない音節，たとえばア行・ハ行・ワ行のそれぞれオ列の音節は，仮名遣いに固定する以前，音声的にもすでにこの区別を失い，結合単位においても，区別は音韻論的にさえ存在しなかったと考えられる．

3　母音組織の意味

1　その図式と結合関係

すでにひずみが加えられ，そこに行なわれる元の，より厳重な，調和の方式は大きく弛められていたけれども，なお当時の書写言語における結合単位の構成は，さきの図式に従って行なわれていた．この組織はゆるやかである．図によって明らかなように，a—iの共通線を中間にさしはさんで，A・Bの領域が明瞭に対立することを示すのは，Aのo・u・ïと，これに対立するBのöにすぎない．つまりo・u・ïに対してöが対立して，たがいに同一結合単位に立つことを避けていたのである．8世紀において，単位中の結合は，この対立を避けるだけで，あとはほとんど自由に結合関係がつくられていたということができる．

Aの領域は線a—ë—e—iをふくんで図の右半分である．ここではöをさけるだけで，その外は自由に結合を保つことができる．前部母音に属する「め」も，後部母音の「ヅ」と結合して，「めヅ＝ラシ」の語を造り，またこれを保つこともゆるされる．「イキどホル」（憤）の語も，一方に「イキ＝ヅク」（息をつく・嘆息する），イキ＝ヅカシ（嘆かわしい）の語があるのを見れば，「イキ」と「とホル」（通）に分けて構成せられた語であろう．とすれば，「イキ」はAB中間の結合線上に構成せられた語であって問題はなく，「とホ＝ル」も「ホ」が書写的に甲乙母音の区別をすでに示しえない音節であったとするならば，もとはB域的に「とほ＝ル」であって起源的に問題がない．「イヤ」（弥）・「ヤけ」（宅）の語も全体がA・Bの両領域の中心線に属して構成せられ維持せられている．「イクサ」（軍）もA域における構成である．A・Bそれぞれの領域は，中央のa—iの線を共

通に保っているのである．各域の単位構成能力は高い．

書紀・万葉にあらわれる「モの」(物)・「モと」(本・下) の語は，一見，勝義におけるA域の母音と，勝義におけるB域のそれとの単位的結合のように見える．しかしそれは古事記において「もの」・「もと」としてあらわれ，もともと全体的にB域における構成による語詞であった．「アどモ＝フ」(率) は，一見，AB両域の混用のように思われる．しかし万葉にあらわれるこの語には1個所，も (母) の仮名によって「み船ごを『アどもヒ』立てて」とするところがある．「もの」・「もと」をすでに「モの」・「モと」としたこの時期には，もとの「アども＝フ」もすでに大方は「アどモ＝フ」に統一せられつつあったのであろう．——「ヲろガム」(拝) は，その甲乙の区別をすでに示さなかった「ヲ」がもともと「を」/wö/ であったにちがいない．「甚・痛」の義において上代には「イタ」・「イト」・「イと」の形があらわれる．「イタ」・「イト」はA域の構成であり，「イと」はB域の結合であり，しかも同じ万葉において「イト」・「イと」の両形を見出すことができる．しかし万葉では「イト」と「イと」の間に意義的に小さいながらあきらかな差異を見出しえないこともない．「イト」は「非常に・実に」の意義に用いられることが多い．「ふな乗りてわかるを見ればイトもすべなし」(巻20)・「わかれなばイトもすべなみ八たび袖振る」(巻20)では「実に」の意味合いが強い．「イと」はこれに対して「非常に・あまりに (も)」の含みが強く，「ほととぎすイとねたけくは」(巻18)，「梅の花いまだ咲かなくイと若みかも」(巻4)，「秋風の吹かむを待たばイと遠みかも」(巻19) では，「イと」は別に存在する「イと＝のキテ」(「甚＝除きて」，殊に・とりわけて，あまりにも) にきわめて近い．「イタ」・「イタ＝モ」・「イト」・「イと」はすべてイタ (痛) に関係する同源の語にちがいない．しかし他がA領域の構成による語であるのに対して，「イと」はB領域の構成によっている．「イタ」と「イト」とが，意義的にドイツ語の ver-sehr-en (傷つける) における sehr にあたるとすれば，「イと」はむしろ «zu sehr» の意義をもっている．この差異を上代，もしくはいわゆる上代よりも更にその以前の人たちは，意義範疇的な差異と考えて (もしくは感じて)，2つをA・Bの2領域にふり分けていたのであろうか (篇末註2参照)．しかしその振り分けには，単なる結合関係の場合とは異って，かすかながらもaとöとの対立があらわれ，ここに，aを非中性的に男性母音としていたところの，さらに前代の母音組織による構成の名残りが，すでに浮び上って来るのである．

2　図式と母音交替

α　　A・B間の交替——「遁音」(Inter-change)

事実AとBの両領域にふり分けられた同じ意義類に属する語には，まずaとöとの対立をふくめて，意義的範疇を異にするものが多い．

「ヲそ」(wösö) は万葉にも鳥について「オホ＝ヲそ＝どリ」の語があらわれ，この「ヲそ」は軽率を意味する語とせられる．しかしこのB域の語に対して，A領域の構成による語として「アサ」(浅) がある．

「ア」は古典において「吾」の意義をになってあらわれる．これに対する「オ＝の」önö は，むしろ「自身」(ラテン語 ipse，英語 -self，ハンガリー語 mag-a, am) である．

「ツき」(月) と「とキ」(時) は，本来，互に無関係な語ではないと思われる．しかしその意義的範疇から見て2つの意義の間には明瞭な範疇的対立がある．これに応じて前者 (tukï) は結合の構成においてA域に，後者 (töki) はB域に属している．

ここに注意すべきは語末のiとïとの関係であって，普通，ウラル諸語，アルタイ諸語において，母音調和の現象にあずかるとき，iは前部母音（従っていわゆる弱母音または女性母音）に，ïは後部母音（従ってまたいわゆる強母音または男性母音）に属するのが原則である．アルタイ諸語のうちトルコ（テュルク）諸語は，その母音調和の現象において固くこれをまもることが多い．まもるというよりは，この古い状態を維持しているのである．iを中性母音として，これを男女両性の母音との結合関係に入らしめる言語は原則としてiとïとの区別を失い，ïをiに組み入れ，またはiのうちに吸収せしめた言語である．蒙古諸語は一般にiを中性母音とする言語として知られている．しかしその古い状態においてはïもまた別に存在したことは，方言的調査に基く比較研究によって説かれるところであり (たとえばA. Meillet et M. Cohen (éd.) : Les langues du monde. Paris 1952. p. 376 ; N. Poppe : Introduction to comparative Mongolian studies. Helsinki 1955 の特に p. 84. および，泉井編「世界の言語」，東京＝大阪，1954，333頁．Louis Hambis : Grammaire de la langue mongole écrite, I. Paris 1945. §10)，また蒙古文語の正書法の歴史を精細に調べることによっても確実に知ることができる．(Б. Я. Владимирцов : Сравнительная грамматика монгольского письменного языка. Ленинград. 1926, 116頁以下，殊に122頁)．ここでのïのiへの合一は，16世紀末の正書法の改革によって，表面にあらわれて来た．ウラル諸語のうち，フィンランド語，ハンガリー語は，その母音調和において，eとiとを中性母音とすることによって知られている．たとえばフィンランド語 vero（食事，税），ontelo（うつろ，くぼみ），onsi（くぼめる）．またハンガリー語 fordít（まわす・かえす），fiu（男の子），vézna（薄い，痩せた，乾いた）等．この最後の語例にあらわれるaは，音価としては開いたoにあ

たり，母音調和的には常に男性母音として取り扱われる．しかしフィンランド語，ハンガリー語をふくむいわゆるウラル諸語におけるはじめの母音調和の現象は，ïとi，ęとeを分ち，それぞれの前者は男性母音，後者は，女性母音としてあらわれるものであり（Л. Хакулинен: Развитие и структура финского языка. I. Москва 1953. §5, §20），このï・ęは調音的には中舌音であった．従ってフィンランド語 mela（船尾の櫂，櫓）はもと *męla であり，leuka（あご，下顎）は *lęuka であり，そして kita（咽頭）は*kïta であって，このï・ęの音は今もなおバルト＝フィン諸語の若干の方言にもそれぞれiとeとともに，それらから区別せられつつ存在し，しかも母音調和に参加しているのである（Хакулинен 前掲書，293頁）．iを中性母音とするトゥングース諸語においても，方言的にはなおi・ïの区別を残すものがある（Les langues du monde, 1952, p. 392）．すべてiを中性的にあつかうものは，もとのïとiの区別を拭い去って，これをiのひとつにまとめたものであって，さきに見たごとく上代日本語の文献にあらわれるïの不安定なすがたは，この移行の途上の様相を部分的に示すと考えることができる．従って「ツき」は tukï として，第1，第2音節がともに男性母音を示しつつA域的に結合し，B域の「とキ」は töki として全体的に女性母音としての結合を示す．すなわち，更に古い段階においては，iは，ïと対立しつつ，純粋に女性母音であったと考えられるのである．単なる中性母音ではなかったとしなくてはならない．その中性化は，ïの喪失もしくはiへの吸収による第2次的な様相への移行の結果であり，ここに /I/ が現出したのである．

この見地からすれば，「クチ」（口，「久知」）なる結合において，第1音節の男性母音uと単位的に関係する第2音節の母音は，当然，もともと，ïとして，全体は *kutï であったと想像せられる．これについては，「カみ」（神），「ツき」（月）が合成の第1語となるとき，それぞれ「カム」・「ツク」（カムカゼ，ツクヨ）となり，「クチ」も「クツ・ワ」（口輪，轡，天治字鏡）となることが思い合わせられる．とすればこの単位は全体としてA域の語詞である．これに対するB域の語としては「こと＝バ」（言），すなわち，*kötö-baがあらわれる．「事」の「こと」もまたこの「こと」（言）と同じものであったのは，いうまでもない．万葉の東語にはまた「ことバ」に対して「けと＝バ」këtö-ba の形もあらわれる．これもA域のクチに対するB域の語であった．

上代日本語には屢々「こも＝リクの」（隠）の語があらわれる．この「こも」はB域の構成である．しかしA域の構成による語としては「クみ＝ド」kumï-（隠処）の語がある．2つは意義的に同部類における対立語と考え（感じ）られたのである．

かように本来的には，iは調和における女性母音であったとするならば，「ヒと」(1) とフタ (2) の意義的対立もよく理解することができる．さきに掲げた8世紀に残存する母音の組織が成立するよりも，更に以前の体系においては，iはïとは別に，分れて明瞭に前部母音（女性母音）の領域のものであり，「ヒと」は「フタ」に対して全体としても明確に対立することができたのである．同様に「ミ」(3) と「ム」(6) の対立的関係も，B域対A域の関係において，よく理解することができる．「よ」yö- (4) と「ヤ」ya- (8) についてはいうまでもない．

なお，「ヤみ」（暗，「也未」）に対して「よも」（黄泉，「よも＝ツ」）と「よミ」（黄泉）があり（yamï : yömi, yömö-），これらの「よも」，「よミ」に対して，「ヤマ」（山）も考えられ（井出至，「所謂遠様の指示語ヲチ，ヲトの性格」，国語と国文学，1960，8月，47頁），また「とも」（伴）に対して「ツマ」（夫・妻）がある．「こと」（異）に対しては「カタ」（一方，左右不整）があり，また「ひ」fï〔φï〕（火）と「ヒ」fi〔φi〕（日）の2つも，本来，別語（別根の語）ではなく，同一の /FI/ の古いA・B領域による対立的分化の結果と思われる．同様にAの「カ＝ル」ka-ru（刈）に対して，Bの「こ＝ル」kö-ru（伐）があり，またキ＝ル（切）がある．「との」tönö（殿）に対して，やや時代が下る倭名抄巻10に「坐売物舎」としてあらわれる「タナ」（店）をも，Bに対するAの構成形として認めることができるのでもあろうか．

「問う」・「訪う」を意味する語は，上代に「トフ」・「とフ」として甲乙2形があらわれる．しかしその用例を記・紀・万葉について整理するとき，「訪う」に関しては乙類による「とフ」が多い（有坂，音韻攷33頁）．ことに古事記においては3例ともに「と＝フ」である．このB域母音による動詞に対して，その名詞形としてはA域による「タビ」または「タび」（旅）があらわれる．さきに「こも＝リクの」に見える動詞語幹「こも」に対して，われわれはA域母音による名詞「クミ＝ド」を見ることができた．「と＝フ」に対して「タび」があらわれるのは，全体をA域化することによって，動詞「と＝フ」のB域的との対立関係を更に強調したのであろうか．とすれば「タビ」は，ïのiへの吸収による第2次的な形である．しかし「訪（ミ）フ」は4段に活用する．従って一般にその名詞形を派生する連用の形は清音「＝ヒ」であって濁音ではない．ここに濁音を示す「タビ」・「タび」の語形の成立については，なお問題の残る所以がある．

動詞「取る」もまた上代に「ト＝ル」・「と＝ル」の2形がある．この語の基本部と交渉すると考えられる「テ」（手）の母音は，A域の「ト＝ル」から見ても，Bの「と＝ル」か

ら見ても，両者の中間線a—iの上に来ている．これは，さきの図式のみによるかぎり，その母音を男女いずれの性の母音に属せしめるべきかを決定することができない．しかし「テ」には別に合成形としてあらわれる「タ＝」の形がある．たとえば「タ＝ナ＝スエ」(手之末)・「タ＝ナ＝マタ」(手之俣)・「タ＝び」(手火・炬)，等．そして他方，「サけ」(酒)に対して「サカ＝」があり，「タけ」(竹)に対して「タカ＝」があるのを見れば，類推的に，甲乙の区別をすでに書写の上にあらわすことのできなかった「テ」も，本来，乙類の仮名による「て」で写さるべきものであったと考えられる．しかも別に，「タカ＝イチ」→「タけチ」(高市)・「ナガ＝イキ」→「ナげキ」(長大息・嘆息)があるのを見れば，「て」に対する「タ」こそ，その基本形であったとしなくてはならない．「タ」には母音 /a/ がふくまれる．aの結合線は一般にa—o—uにおいて，もっとも鮮明である．従ってすでにひずみの加えられた8世紀の図式より以前の，より徹底した図式を，さきに見たウラル諸語におけるごときその調和の原型から推定すれば，そこにおいてこのaは，まさに男性母音に組み入れらるべきものと考えられる．とすれば意義範疇の対立上，類推的に，その動詞は対立的に女性母音による「と＝ル」が文献以前の原形であり，「ト＝ル」は結合原則弛緩後の第2次形であったとすべきであろう．

A・Bの2域による意義的分化は，「ア＝ども＝フ」(率)と「ア＝ツム」(集)の間にも見ることができる．また「ナ」(名)と「ネ」(音)・「ネ＝グ」(祈)の間にも．

「ハツ」(初)と「ホツ」(上端の，「ホツ枝」)もまたこれにあたり，この2語の「ツ」は「天ツ」の「ツ」であって，2語とも「ハ＝ツ」，「ホ＝ツ」と分かたるべきもの，そしてその「ハ」・「ホ」はそれぞれ「端」・「尖」を意味し，ともに「辺」を意味する甲類の「へ」(そのところ)および乙類の「𪜈」(その近まわり)に対立的に対応し，これに万葉に散見する「ハマ＝び」(浜辺)の「ひ」を加えるならば，この5つは，

a　男性的(A域的)　ハ＝(端)　＝ひ(辺，そのところ)　ホ＝(上端)

b　女性的(B域的)　＝へ(辺，そのところ)　＝𪜈(辺，その近まわり)

となって，3つの接尾要素のうち，bの中の2者の意義的区別が，繊細ながら明確なのに対し，却ってaの「ひ」とbとの区別が一般に曖昧になって来る．事実，「ひ」は「ハマ＝び」・「ヲカ＝び」・「ヤマ＝び」・「カハ＝び」と用いられて万葉においても，bの「ヲカ＝べ」(岡のそのところ)，「カハ＝𪜈」(川のほとり，近く)と区別することができない．

ところでここに注意されるのは，「ひ」が万葉ではA域の構成による語のあとにつづいて，それと密接に結ばれていることである．思うに曽ての母音調和の現象は密接に結ばれ

る接尾的な要素（ときには小辞すなわち助詞）にも貫透して，その本来の活動範囲を保持した名残りをとどめているのであって，「ヤマと」，「とこ」，また「ヤマ＝の」に対しては母音e・ëによる「へ」・「ゑ」がつづき，「ヤマ」・「ヲカ」のごとき男性母音による構成単位のあとには母音ïによる「ひ」がつづいていたのであろう．——ちなみに上の「ゑ」は，「ウ＝ゑ」（上）にあらわれるそれと同じものであって，「ウゑ」が2つに分析されることは「ウ＝レ」（木末）との比較によっても知ることができる．この「レ」は「こ＝レ」(此)・「そ＝レ」（其）・「ア＝レ」の「レ」にあたり，「こ」・「そ」・「ア」が指示代名詞の語根的部分として取りはずし得ることはいうまでもない．一方この「ウ＝」は「上，表面」を意味したものと考えられ，それを含む形には，別に「ウ＝ク」（浮・〔水の〕表面上に居る・あがる）がある．「ウ＝ゑ」は古い合成語として「上のあたり」の意義をもち，合成語であったために，前部（女性）母音のëがすぐれて後部（男性）的な母音uと接合して，一見，本来的な結合単位を構成したのである．

密に結ばれた接尾的な接辞に母音調和の現象が及ぶ例は，小辞もしくは助詞「の」についてもみとめられる．8世紀までに「の」は一般化して，当時の言語に能動的に活動していたものはもっぱら「の」であったが，しかし古くは，「ミ＝ナ（＝ト）」（水之〔門〕），「マ＝ナ（＝カヒ）」（眼之〔交〕），「マ＝ナ（＝ブタ）」（眼之〔蓋〕，瞼），「タ＝ナ（＝マタ）」（手之〔俣〕），「ウ＝ナ（＝ハラ）」（海之〔原〕），「モモ＝ナ（＝ヒと）」（百之〔人〕），「ヌ＝ナ（＝と）」（瓊之〔音〕），「ナミ＝ナ（＝と）」（波之〔音〕），「カム＝ナ（＝ツき）」（神之〔月〕，10月）の諸形があり，これらが固定した形で書写的に8世紀に伝えられ，ここでは「の」にあたるものがひとえに「ナ」としてあらわれる．これに対して「こ＝の（＝ハ）」（木之〔葉〕），「ホ＝の（＝ホ）」（火之〔穂〕）等がやはり固定した形として伝えられたが，ここでは「の」は母音調和的に，先行する乙類の母音öに密に接して，みずからもöの母音をもってあらわれている．「ホ＝の＝ホ」の語の第1音節が，ここでは乙類のö母音をふくむ音節であったことは，「き」kï（木）に対する「こ＝の＝」kö-nö-（木之）の関係からも類推的に理解することができる(25頁参照)．さきに述べたごとく，ホの仮名にはすでに甲乙の区別があらわれることがなかったのである．のみならず，一方，純粋，本来的に甲類的な「ホ」に対しては，当時，言語習慣的に「＝ツ」（ホ＝ツ「上端の」）があらわれ，この「ホ＝ツ」のすでに存在することが，ホの2類の区別を失った当時，「ひ」（火)に対しての「ほ」には「ホ＝の」を用いしめ，一方，純粋に甲類的な「ハ，ホ」（端，上端）に対しては「ツ」による「ハ＝ツ」・「ホ＝ツ」を使用せしめ，以後，「ツ」は

「の」とともに，「ナ」を忘れて，漸次，無差別的に一般化して行ったものと思われる．

この「ツ」も，しかしまた，古い小辞であり，密に接する語詞につづいて，みずからもまた，母音調和的現象を示していた事実を，時に見出しうることがある．

「男・少男」を意味する語には，「ヲとコ」とともに，また「ヲのコ」もあらわれる．この2つにおける「ヲ」は，「小・少」とも，また「雄」とも，取ることができる．いずれにしてもその音は，音韻的にむしろ /wö/ であったことは，これにつづく「之」の意味の仮名が，すべて乙類になっていることによって知ることができる．この/wö/につづく「と」は意義的に「の」にひとしく，また上の「ツ」にひとしい．とすれば「と」と「ツ」は調和的に母音交替を示すところの本来同一の小辞であった．因みに，「ヲと＝とシ」（前年，昨年）の「ヲと」wötö は，「ヲチ」wöti（遠，彼）の並立形式であって，「ヲと＝コ」（小男）の「ヲと」とは一応別語である．「少男」の「ヲと」は離脱的に固定して「弟（ヲミ）」の語を生んでいる．このように先行する体言に密接に結合した小辞は，またその体言の母音の影響下に母音調和を示していたとすれば，「こ＝ヌレ」（木〔の〕末（ウレ））の「ヌ」にふくまれる母音「ウ」は，少くとも8世紀までに，如何様に発音せられたのであろうか．「ウレ」の語意識が強いために，飽くまで「ウ」と発音せられたであろうか．または先行する母音 ö からの口蓋化をうけて ü に近く発音せられたであろうか．この ü は単にいわゆる音声的現象（いわゆる «phonetische Erscheinung»）〔y〕にとどまって，音韻 /ü/ を構成することはなかったであろうか．また一般に前代の母音組織において，/ü/ が存在することはなかったであろうか．同様にたとえば，「ミ＝ナ＝ト」の「ミ」が曽ても「み」でなかったとすれば，それにつづく「ナ」は，あくまで音声的にも a であって，先行する口蓋音の影響下に音声的現象〔ä〕をあらわし，更に音韻 /ä/ を構成し，/ä/ として組織中に存在したこともなかったであろうか．これらはさらに今後の問題であり，問題は8世紀より以前の前代の母音組織にかかっている．

問題をもどして，A・Bの2領域，またはその前代の更に徹底していたと想像せられる母音組織において，前後部2類の領域間にわたる母音交替を示す語の間の対立を見るならば，たとえばなお，「ハラ＝ニ」（散り散りに）に対して「ホろ＝ニ」（ばらばら鳴るさま）があり，また「よヒ」（宵）と「ユフ」（夕）がある．「よヒ」は日の暮れ切っていまだ中夜に及ばぬ時点と時間を指し，「ユフ」は日の暮れがけである．「よヒ」はまた古典に「ヨヒ」としてもあらわれる．にわかに決定することはできないけれども，この意義的対立と母音法（Vokalismus）より考えてユフ（A）に対する「よヒ」（B）が正しい形かと考え

られる.「ミチ」miti（路・径）と「マチ」matï（小径による田の区劃）の関係もこれにあたり，手前の「こ（＝レ)」(此）に対しては向うの「カ（＝レ)」(彼）がある.「の＝ム」(飲）に対して推古紀の「ナ＝ム」(嘗）があり,「この＝ム」(好）に対して「カナ＝フ」(叶）がある.「イ＝ル」yi-ru（射）のBに対するAの「ヤ」ya（矢）もA・Bの結合単位的対立に入れることができる．単なる「日」よりも，むしろ押し移る時間や日晷を意味することが万葉の作歌によって想像される「け」（日）が（巻4「長き気をかくのみ待てば」，巻13「草枕此の旅の気に妻さくべしや」等)，ただ助数詞として「イク＝カ」（幾日),「イツ＝カ」(五日),「フツ＝カ」(二日),「モモ＝カ」(百日）のごとき構成にあらわれるにすぎない「カ」(日）と意義的範疇において，B対Aとして対立する現象も，また同様に理解することができる.

ここに注意すべきことは,「け」と「カ」に見られるように，母音ëとaが対立する現象である．8世紀に残る母音組織の図式においては，2つはともに中心線上に位してその結合乃至対立関係に関して矛盾するところはない．しかしその図式以前の，より厳密に前後部の母音の対立を強調する前図式においては，aはまたëとも対立したのである．われわれは先述のごとく，ë がきわめて広いエ列の母音，わずかに口蓋化を経た母音として，/ä/ として，理解することができる．これはまた「タカ＝イチ」→「タけチ」(高市),「ナガ＝イキ」(長息）→「ナげキ」(嘆）の推移の関係によっても知ることができる．しかるにëには,「け」・「カ」(日）のごとく軽微にもせよ，意義的対立もしくは分化を伴ってあらわれる本来的な $ë_1$ と，aとiとの熔合よりなり，aと意義範疇的対立を本質的に持つことなしにあらわれた第2次的な $ë_2$ とがあった．従ってまたこの $ë_2$ は，音韻として本来B域的な性質にも拘らず，十分にA域的母音と単位的に結合することができた．従ってたとえば「サけ」(酒）は「サカ」,「タけ」(竹）は「タカ」としても，意義的対立をもたらすことなしにあらわれることができ，きわめて広いë(ä) によるこの音節「け」は，第2音節において意義的対立をよぶものではなかった.「フネ」(舟）→「フナ」,「ムレ」(群，村，岳）→「ムラ」の関係も同様に理解することができる．ともに「ネ」および「レ」も，本来「ね」・「れ」とせらるべきものであったが，8世紀にはその母音を甲乙に区別してあらわす仮名の使いわけがなかったのである.

以上を通じて8世紀に残る（または，あらわれる）日本語の結合単位の構成は，一応先の組織の図式に従って行なわれていたけれども，しかしA・B2つの領域を貫いて行われた母音交替現象を通じて，なおその前代の組織と図式を窺い知ることができる．これによれ

ば，母音ë(ä)・e・iはöともに前母音部（女性母音部）を構成し，母音aはo・u・ïとともに後母音部（男性母音部）をなすものであった．そのうち単位的に後部母音と結合し，また意義的対立を伴うことなくaと交替し得た第2音節のエ列の母音は，本来$ë_2$であったと考えられる．「ナ㊁」（苗）→「ナハ」，同様に「イネ」（稲）→「イナ（＝ツび）」（米粒），また「タテ」（楯）→「タタ（＝ナミ）」（楯並），等（タテは立ツ，下二，の連用形からの形，しかし甲乙の区別をもつカ・ハ・マ行下二段動詞の連用には常に乙類の仮名があらわれる）．

図式のA・Bの両域，および更に古く存在してこの図式の起源となった前代の図式における後部・前部の母音の2つの領域を通貫しつつ，意義的範疇の移行を伴ってあらわれる母音交替を，「逓音」の現象ということができる．

β　A内およびB内の交替――「迭音（てつ）」(Intra-change)

以上のA・B間を貫く母音交替に対して，AおよびB域のそれぞれ内部における交替には，原則として，意義的範疇の対立がない．この交替を私は，さきの逓音に対して，「迭音」と名づける．

「ムラ（＝クモ）」）叢雲）と「モラ（＝クモ）」の「ムラ」・「モラ」はともにA域の構成である．そしてここには文体論的な価値以外に意義的対立はない．同じように，「カブ（＝ツチ）」（頭槌）と「クブ（＝ツチ）」，「カみ」（神）と「カム（＝カゼ）」(神風)，「ウツツ」（現）と「ヲツツ」，「ナナ（＝ヨ）」（7夜）と「ナヌ（＝カ）」（7日），がある．また「ひ＝ウ」（聶（ひ）う）に対する「ハ＝グ」（剝ぐ）も，A域内の交替として考えることができる．語末音節「グ」による形をここにあげたことについては，「タ＝ブ」（食）に対して古語に「タ＝グ」（食ぐ）の形があったことが考えられる．「ヲノノ＝ク」と「ワナナ＝ク」（慄）との間も単に文体論的な差異であつて，意義的範疇に差異はなく，「ツナ」・「ツノ」・「ツヌ」（綱，〔栲〕綱）は同一であり，「ツき」（月）と「ツク（＝よミ）」（月〔読〕），「＝ドチ」*dotï（達）と「タチ」*tatï も変りがない．「アサ」（朝）と「アス」（明日）もここに入れて考えられるであろう．これについては意義論的にドイツ語 morgen に対する英語 to-morrow などを考え合わすことができる．morgen と -morrow は同根の語である．「夜が明ければ，朝になれば」は，ただちに明日となるからである．この種の現象を示す言語は多い．

B域，または，前代の母音組織における前部母音の領域（「前B域」）中に行われた交替については，万葉にも見える「黄シム」（黄色に染める）の「シム」（染）と「そム」（染，巻20「色深く夫（セナ）が衣は曽米（そめ）ましものを」）があり，「とキ」（時），「とキ＝ハ」(常盤）と「と

こ」(常),「とこ＝よ」(常世) との関係もB域または前B域内における母音の移行もしくは交替によって行われ,「ニ」(荷) と「の (＝とり)」(荷持ち),「(ミ＝) キ」(御酒) と「(サ＝) け」(酒) も同様にして意義的な差異がない.「ケ＝フ」または「け＝フ」(今日) は名詞「フ」(日) を含む合成語である. この「ケ」または「け」は「こ＝の」・「こ＝レ」の「こ」と同域に属して, ともに「此の」・「今」を意味し, 事実, 古事記および紀の允恭記にあらわれる「こ＝ぞ」(去鱒(こゝ)) は「今夜」を意味しているのである.「け＝サ」(今朝) もまたこれに入れて考えられるであろう. 一方,「こ＝ぞ」は万葉に「去年」の意義をになってあらわれる. この「こ」は「キ＝の＝フ」(昨日) の「キ」,「キ＝そ」(昨日) の「キ」と迭音するものであって, ここに,「こ」――「け」・「ケ」の1類 (「今」) と「こ」――「キ」の2類 (「昨」) とが, ともに同じB域または「前B域」中において意義的範疇を異にしてあらわれるように見える. しかし後者の「こ」――「キ」は, すでに「こ」と「キ」の交替によって想像せられるように, 本来, 動詞「来(ク)」のそれぞれの形であって, 動詞「ク」には今日の意義での「来る」のほかに,「往く」・「去る」の意義があったことは, 紀巻8, 仲哀紀に「何処将去(イズテモテクル) (将去「毛天久雷」) 白鳥ゥ」の用法があることによって知ることができる. 万葉巻1「倭(やまと)には鳴きてか来(ク)らむ」の「来らむ」も, この歌の詠まれた位置 (吉野) と「倭」(大和朝のみやこ) との地理的関係を考えるならば, やはり「去る」・「行く」の意義をもつことは明らかである. 従って「こ」――「キ」の「こ」は「来」(去) であり,「こ」――「ケ」・「け」の「こ」は「此」である. 併せて「こ・ケ・け」は「此」の迭音であり,「こ・キ」は「来」をめぐる迭音である. 2つの類はそれぞれ別語であって, 同域内の迭音による意義の範疇的分化による結果の形ではなかった.

B域または前B域に属する語にはまた「け」(毛) がある. この語はまた「カ」, あるいは「＝カ」として, 合成語「シラ＝ガ」(白髪) にあらわれる.「け」――「カ」はB・A両域にわたる母音交替であって, 一見, 意義的範疇の転移を伴なう遁音現象のごとくにみえる. しかし「け」と「カ」の間には意義的分化もしくは転移と考えられるべきものはない. 2つはただ「サ＝け」(酒) と「サ＝カ」,「タけ」(竹) と「タカ」の関係にあるにすぎない ($\ddot{e}_2$). 従って一般に, 乙類の母音ëがaに近い広母音であったことが想像せられ, 併せて, 前代における母音調和の現象は, その要素が密接に結合しそのまま固定して残された合成語において, 第2要素の名詞にまで管到して伝えられたことが想像せられる. 一方, 上代の下二段活用に連用形の母音ëが, 起源的に, 語幹末尾母音aに, すべての動詞に大体一般的な連用形の母音iが添えられて成ったものとすれば,「タカ＝」(竹) に対す

る「タけ」,「＝カ」(毛・髪) に対する「け」も，それぞれ原形 /-a/ に別の i が添えられて成ったものかと想像せられる．そしてこの /i/ は，「若子(ワクゴ)イ」に見える「イ」とひとしく，もとは指示詞であったことが考えられるとすれば (泉井,「言語構造論」, 東京・大阪, 1947 99—100頁),「イ」は後置定冠詞的にはたらいて，先行する名詞を独立的に固定せしめるものであったろうか．後置冠詞はヨーロッパにおいてデンマーク語，スェーデン語等の北欧語，またルーマニア語にあらわれ，マライ＝ポリネシア諸語においてはセレベスのマカッサル語，スマトラのガヨ語にあらわれる (泉井,「マライ＝ポリネシア諸語」〔世界言語概説, 東京, 1954〕1060頁)．古事記中巻 (神武)，長歌に見られる「オひシ」(大石) のごとき語は，大野晋によれば，もと *öfö-isi であり，ついで öfïsi となったと考えられるとすれば，ï にはまた結合 öi より来たものがあることになり,「木」を意味する「き」kï も,「こ＝の＝マ」(木の間)・「こ＝の＝エ」(木の枝) のごとくただ合成語の第一要素として残る「こ」kö を原形として，これを i によって定置した形と考えることができる．「こ＝」(木) はまた「＝け」と同域的の交替をなし (「御(ミけ)木」・「真(マけ)木ばしら」),元来，B域または前B域の構成に属する語である．並行的に,「ひ」(火) もまた，もとはおそらく乙類の音節に属し，ただ合成の第一要素として残る「ホ」(前述の「ホ＝の＝ホ」のホ) も,「ほ＝」(fö-) を原形とする語であったと考えられる．

一方,「サ＝け」(酒) の「＝け」は，すでに「＝け」として一応固定してから，第2次的に改めて「ミ＝キ」(御酒) の「キ」と同域的に迭音することができた．「サ＝け」の「サ」は「サ＝み」(さ身),「サ＝エダ」(さ枝),「サ＝ごろも」(さ衣),「サ＝ヲシカ」(さ牡鹿) の「サ」である．

さきに私は，後部母音の音節につづき，これと単位的に結合する音節のエ列の母音が，もし a と交替しうるならば，その音節をあらわす仮名に甲乙の区別が有ると無しにかかわらず，その母音は元来 $ë_2$ であったと見ることができるとの意味のことをいった．しかし「マめ」(豆)・「カめ」(亀)・「アカめ」(魚名)・「クチめ」(魚名)・「スズめ」(雀) 等は，その「＝め」が「＝マ」となることがない．それは,「＝め」が愛称または貶称の古い接尾辞であって，先行要素と単位的に結合するものではなかったからであり，また，ai よりなる ä，すなわち $ë_2$ でもなく，本来の ë ($ë_1$) であったからである．「こめ」(米) も「こマ」としてあらわれることがない．「イナ＝ツび」(米粒，傍名抄) の形はあっても，「こめ」についてはただ「こめ＝ツび」(米粒) だけがある．とすれば「こめ」の「め」はこの「＝め」($ë_1$) とひとしいものであろうか．

なお「ニ」(瓊) はA・Bの中心線上のiにより,「前B域」的には前部母音の領域に属すべき音節による語のように見える. しかし, 後部母音的な「ツき」(月)・「カみ」(神) の「＝き」・「＝み」がそれぞれ「(ツ) ク＝」・「(カ) ム＝」としてあらわれるのに並行して,「ニ」は「ヌ＝ナと」(瓊の音) のごとく「ヌ」としてあらわれるの見れば, この「ニ」の母音はむしろA域のïであったと思われる.

4　前代の母音組織

さて先述のように, 乙類の母音öをふくむ音節と単位的に結合する音節のオ列母音は, 常に乙類であった. オ・ホ・ヲのごとく, 8世紀において甲乙の区別を仮名の上にあらわすことがすでに出来なかった音節のオ列母音も, ここでは少くとも前代において, 乙類のö であったと考えられる. 従って「ヲそ」(軽率) は *ösö であり,「ホそ」(細) は *fösö であった. ö はoと単位的に結合しなかったのみではない. すぐれて後母音的なuともまた結合はまれであって,「クシろ」(釧),「ムシろ」(席) のごとき, iを中性としたu—ö による結合は, 8世紀に残存しえたけれども, その成立の事情はおのずから別に2様の分析によって考えられ得ることもすでに述べた. 事実このようにöとuの結合は残存するものもきわめて乏しく,「とブサ」(朶, または鐺) のごとき語も, 一方に「と＝ブサ」(鳥総) と分析して合成語的に説明せられているほどである (万葉巻3の391歌). しかしこの語の意義的考証は山田孝雄「万葉集講義」3の671—677頁を参照せられたい. ——なお「ヤシろ」(社) も「ヤ＝シろ」(屋代) 等として説明することができる.

ところで, 石川竜麿は先の「ヲそ」(オホ＝ヲそ＝どり) を, おそらくは誤って,「ウそ」(嘘言) としてかかげているのであるが, もし仮にこれを「ウそ」とすればその「ウ」の音は果してuであったであろうか.「ヲそ」も *ösö と考えられる. oよりもむしろすぐれて後母音的なuがただちに前母音的なöと結合することは, まことに考えがたい.「ウそ」は, 母音調和の現象がはたらきとしてはすでに停止し, その痕跡として慣習的・固定的にただ書写体系において維持せられた8世紀の母音法においては或いは存立しえたであろう. しかしその成立し, その成立に調和の現象がはたらいていた前代においては, 8世紀においてさえ最もすぐれてB域的なöと, 8世紀においてさえもっともA域的であったuとが, ただちに単位的に結合したとは考えがたい. もしこの「ウそ」が前代に成立していたとすれば, ——そしてそのöは動かしがたいとすれば——その形は, 曽て, *üsö のごとく, uはむしろ前母音的なüであったかと考えられる. さきに「こ＝ヌレ」(木末) が「木＝

の＝ウレ」からなる語であって，その全体が合成語ながら1つの全体として単位的にかたく結合していたとすれば，そこにあらわれる「ヌ」は，或いは *-nü- であったかと考えたことがある．同じことは「こヌミ」（地名）の「ヌ」についても考えることができる．紀の推古紀には人名「久僧」があらわれる．もしこの仮名が正しいとすれば，この人名は「クそ」であり，その「＝そ」が動かしがたいとすれば，「ク」はやはり *kü でなくてはならなかったと思われる．一方，「屎」の意義をもって神代紀には「倶蘇」の語があらわれる．「倶蘇」は「クソ」である．2つの音節はともに後部母音でありA域の母音をふくみ，この単位の結合関係に疑問はない．しかし倭名抄巻2には「久曽」としてあらわれる．これは，8世紀的な仮名遣いに従えば，「クそ」でなくてはならない．一体にア行ヤ行のエ列音の混同を除けば正確といわれる倭名抄の著者にも，この点に関して古音の記憶に誤があったのであろうか．或いは別に伝えられた当時の音をみずから写したのであろうか．仮に「クそ」も正しいとすれば，その形は，正確には *küsö でなくてはならない．のみならず「クソ」（「クそ」）は，上代にもあらわれる「クサ」（腐・臭）に関係する語とせられる．とすれば意義類の範疇的対立上，A域または「前A域」的な「クサ」に対して，B域的な *küsö が本来正しく，固定的に8世紀にのこされた「クソ」の原形はもと，「クそ」であり，ひいて，*küsö であったと考えられる．「シヌ＝ブ」（忍）は *sinü- か *sïnu- のいずれかであったであろう．

	B		A	
広母音 (wide)	*ë(ä)			*a
中広母音 (mid-wide)	*ö	*e	*o	
狭母音 (narrow)	*ü	*i	*u	*ï
	円唇的 (round)	非円唇的 (unround.)	円唇的 (round)	非円唇的 (unround.)
	前部母音 front v.		後部母音 back v.	

以上すべての母音交替的事実を綜合し，その成立の基盤となった母音組織を考えつつ，上の ü に関する事情を考慮するならば，8世紀に残るものより更に以前の，「前代の母音組織」は，上のごとくに考えることができる．

母音の交替関係を通じて再構せられたこの母音組織が，全体として，ウラル諸語，および，アルタイ諸語における古い，前代的な，母音組織に近づくもののあるのを示すのは事実である．しかしこの事実が，直ちに，日本語のこれらの言語に対する系譜関係を暗示するものの一つとせらるべきか否かは，なお将来の問題としなくてはならない．

註1　Steinitz, Wolfgang : Geschichte des ostjakischen Vokalismus. Berlin 1950. Ostjakische Grammatik und Chrestomathie. Leipzig 1950. Geschichte des finnisch-ugrischen Vokalismus.

Stockholm 1944 〔Acta Instituti Hungarici Universitatis Holmiensis, Series B, Linguistica 2〕(これは絶版で未見であるけれども，その行論と結論との大体は想像することができる).

Ramstedt, G. J. : Einführung in die altaische Sprachwissenschaft. II. Formenlehre. Helsinki 1952. A Korean grammar. Helsinki 1939. (p. 25—)

Poppe, Nikolaus : Khalkha-Mongolische Grammatik. Wiesbaden 1951. Introduction to Mongolian comparative studies. Helsinki 1955.

註2 この「イタ」「イと」「イト」に関する考えについては，その後，阪倉篤義が「<いと>，<いたく>をめぐって」(島田教授古稀記念国文学論文集，1960) において展述された.

追 記

現代朝鮮語にも，mat「味」に対する mɔt「風趣」，sal-da「生き（てい）る」に対する sɔl-da「生(なま)である，熟さない」，pul-da「吹く」に対する pʌl-m (pʌl-ʌm)「風」，kol「谷間」対 kul「洞穴，空倉」等の後部母音間の交替のほか，čča-da (水分を)「絞(しぼ)る」に対する či-da「洗いおとす」のような前・後両部にわたる交替もみとめられることがある．しかしその遞音・迭音の関係をもって説明せられる現象であるかどうかは，いまだ不明である.